

ダム等管理フォローアップ

意見を受けての報告書修正対応表

【紀の川大堰】

平成27年3月

【紀の川大堰】

1. 事業の概要

特になし

2. 治水

特になし

3. 利水

特になし

4. 堆砂

特になし

5. 水質

特になし

6. 生物

項目	意見	整理状況	今後の対応方針
6.3 生物の生息・生育 状況の変化の検証 本編 p 6-86～88、 107～110、176 概要版 p 54、55、 58～60、69	評価結果の「種構成大きな変化なし」の表記は分かり難いため、「種構成比率」に修正すべきである。 ・魚類種構成の経年変化のグラフには、科別の種構成比率が記載されているため、「科単位の種構成比率」と正確に記載する方がよい。	・ご指摘に沿って修正する。 【委員会の意見により修正】 ・本編 p 6-86～88、107～110、176 ・概要版 p 54、55、58～60、69 ・種の構成比率の変化に関する記述は、『科別の種構成の比率』又は、『目別の種構成の比率』に修正。	—
6.3 生物の生息・生育 状況の変化の検証 本編 p 6-97～99 P 6-146 概要版 p 56	・攪乱頻度が低下したことにより、1年生草本から多年生草本やアカメヤナギ等の低木に変化しており、記載内容の通りであるが、5年～6年でこうした変化が見られるため、今後も樹林化が進行する可能性が高い。このため、今後はどうしていくのかをお聞かせ願いたい。	・現時点では治水上の影響はないが、今後も河川水辺の国勢調査等を通じて、樹林化の傾向を把握する。 【委員会の意見により修正】 ・本編 p 6-146	・今後も引き続き河川水辺の国勢調査等を実施し、湛水域における樹林化の傾向を把握する。
6.3 生物の生息・生育 状況の変化の検証 本編 p 6-106 p 6-107 p 6-108 p 6-147 p 6-183 概要版 p 58、p 72	・カワウが大堰の建設前後で増えているが、「全国的な傾向である。」との記載だけでは検証にならないため、全国的な傾向に比べてどうなのか？等の検証を行うべきである。	・湛水域区間と紀の川本川全体（評価区間）の水鳥に占めるカワウの変化の状況を示すグラフ（H12～H17）を示す。 ・紀の川大堰湛水域において、湛水面積の増加が一因となり、周辺地域等からカワウが飛来して増加した可能性を記述。 ・本編 p 6-106、107、108、147、183 ・概要版 p 58、p 72	・今後も引き続き河川水辺の国勢調査等を実施し、湛水域におけるカワウの生息状況を把握する。
6.5	・回遊性魚介類の確認状況の図を	・新六ヶ井堰の魚道と紀の川大堰	—

<p>環境保全対策の効果の評価</p> <p>本編 p 6-171 p 6-183 p 6-184 概要版 p 67</p>	<p>見ると、サツキマスからニゴイ属までの魚種は新六ヶ井堰の時には確認されておらず、大堰暫定供用後に確認されているが、魚道の機能向上によるのではなくて調査努力量の違いによるものではないのか？この表では効果があったとは言えないのではないか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・凡例の記載が「紀の川大堰より上流…」と記載されているが、新六ヶ井堰の時も紀の川大堰地点を境に調査を行っていたのか？ ・紀の川大堰は新六ヶ井堰より下流に作ったため、新六ヶ井堰の地点では確認されなかった種が確認され、確認種数が増えたのではないか？ 図をもっと分かりやすく表現した方が良い。 	<p>の魚道における調査努力量を統一した遡上実績をグラフに示した資料を作成し、修正。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上記の修正に伴い、評価、まとめの文章も修正。 <p>【委員会の意見により修正】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本編 p 6-171、183、184 ・概要版 p 67 	
--	--	---	--

7. 堰と周辺地域との関わり

特になし